



TITLE:

<図書紹介>ジョナサン・H・ターナー著『出会いの社会学 対人相互作用の理論展開』（正岡寛司訳, 明石書店, 2010, p.456）

AUTHOR(S):

中尾, 友香

---

CITATION:

中尾, 友香. <図書紹介>ジョナサン・H・ターナー著『出会いの社会学 対人相互作用の理論展開』（正岡寛司訳, 明石書店, 2010, p.456）. 京都大学生涯教育フィールド研究 2013, 1: 73-77

ISSUE DATE:

2013-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/174237>

RIGHT:

【図書紹介】

ジョナサン・H・ターナー著『出会いの社会学 対人相互作用の理論展開』  
(正岡寛司訳、明石書店、2010、p.456)

中尾 友香

<Book Guide> Japanese Translation of Jonathan H. Turner, *Face to Face: Toward a Sociological theory of Interpersonal Behavior*, 2002

Yuka NAKAO

1. はじめに

本書はアメリカの社会学者ジョナサン・H・ターナーの著作、*Face to Face: Toward A Sociological Theory of Interpersonal Behavior* (2002, Stanford University Press)の邦訳書である。

日本語タイトルの「出会い」という言葉からはロマンチックさが連想されるが、本書で主に展開されるのは、通常、個人レベルの問題として受け止められがちな対人相互作用を、マクロな視野において分析・考察しようとする試みである。この意味で、筆者のように、芸術家コミュニティにおける個々の「自分探し」と相互作用のダイナミズムを研究テーマとする者にとっては、必要不可欠な先行研究の一つと言える。

ターナーは 1988 年にも、対人相互作用をテーマとした著作 *A Theory of Social Interaction* (1988, Stanford University Press)を發表している。両書の内容を比較してみると、2点の相違点が見出される。第一に、1988年の著作では対人相互作用が次の3つの構成特性 (constituent properties) に分けて考察されている。「動機づけの (motivational) 特性」、「相互作用の (interactional) 特性」、「構造化 (structuring) 特性」である。これに対し、本書では3つの特性自体よりも、それらの特性をうんでいる「力」で分けられ分析される。その結果、対人相互作用の特性が「感情」を中心軸として、まとめ直されている。第二に、1988年の著作では、対人相互作用の過程そのものに焦点を当てられているのに対し、本書では対人相互作用が、人間生物学的・社会構造的・文化的に、どのように制約されているかを分析することに重点がおかれている。すなわち、1988年の著作では、対人相互作用自体がミクロな視点で考察され、本書では、そのような対人相互作用のマクロな位置づけが明確化されている。ゆえに、両書を合わせて読むことによって、対人相互作用の包括的理解が可能になると考えられる。

以上のことを踏まえながら、本稿では、本書で展開される対人相互作用がどのような力によって動いているのか、そしてそれは人間生物学的・社会構造的・文化的といったマクロな構造とどういった関係にあるのか、またそこで見られる意味について、概観・検討したい。

## 2. 著者について

ターナーは自身を「一般理論家」と称しているが、ここでは、本書の訳者正岡寛司による「あとがき」を参考にしながら、社会学における著者の位置づけを見ていきたい。正岡はターナーを「彼は現代社会学の主流に抗うかのように『壮大な理論』（グラウンド・セオリー）の復権請求を声高に叫ぶ時代の異端児の一人である。」<sup>1</sup>と紹介している。ターナーは、現代の社会学があまりに多岐に分化し過ぎて、共通性をもたないことを問題視している。したがって、ターナーの目標としていることは、これまでの理論の統合なのである。「社会学の伝統的な思考の成果を掘り起こして精査し、そしてそれらを現代の先進科学の知見と照らし合わせながら、もういちど社会学の統合的な体系化を図ること」だと正岡は述べている。

ターナーに対する批判は「主として『壮大な理論』の構築と、生物学への志向の強さに向けられる」ことが多いという。本書についてはいくつかの書評があり（Hammond 2002, Kristiansen 2004 など）、ミード、シュッツ、フロイト、デュルケム、そしてゴッフマンのような理論家たちの仕事に対する深い読みと、的確な要約への評価は高い。生物学的な視点に関しても、対人行動についての理論を構築するにあたり、還元主義的思考を避けるべきことの重要性を指摘している点も、評価されている。

## 3. 本書の概要

本書の主な目次は次の通りである。

- 第一章 理論的な基盤
- 第二章 社会文化的な組み込み
- 第三章 生物学的な組み込み
- 第四章 感情の力
- 第五章 相互交流の力
- 第六章 象徴の力
- 第七章 役割の力
- 第八章 地位の力
- 第九章 生態的な力と人口誌的な力
- 第十章 ミクロ力学

①対面的な相互作用の先行研究（第一章）、②対面的な相互作用を制約するもの（第二章、第三章）、③対面的な相互作用固有の力学（第四章から第九章）、④理論的まとめ（第十章）、と大きく分類することができる。

ゴッフマンは社会学的分析の基本的な要素を「出会い」（Encounter）とし、「焦点の定まっている出会い」と「焦点の定まっていない出会い」に分類した。「焦点の定まっている出会い」とは、「人々が認知的ならびに視覚的な注意をある対象に集中し、それをしばらくのあいだ維持することを事実上合意している場合に生じる」<sup>2</sup>出会いとされる。ターナーが本書において分析対象にしているのはこの「焦点の定まっている出会い」である。「焦点の

定まっていない出会い」に関しては深く追究することはしていない。しかし「焦点の定まっていない出会い」は、その出会いが起こっている場の制約にいつそう依存するという違いはあるとしても、「焦点の定まっている出会い」の理論が同程度当てはまる可能性があることをターナーは指摘している。

本書で追究していく問いをターナーは次のように提起している。

人間が対面的な相互作用に関わる時、いったいどのようなことが起きているのであろうか。対面的行動に随伴する過程とメカニズムはどのようにになっているのだろうか。またこれらは人間生物学、社会構造、文化によってどれほど制約されているのだろうか。<sup>3</sup>

ターナーが対面的な相互作用に着目する理由はこれまでの社会理論に二つの欠点があると考えているからである。

第一にポストモダンな状況とみなされる事象によって人間関係の性質が劇的に変化した、と自明視されている点である。ここ数十年で社会が大きく変化したことは事実である。しかし、コミュニケーションを媒介する技術がこれほど発展した現代においても、依然として「フェイスツーフフェイス対面的な相互作用」は重要な位置を占めており、人は特に感情的に好意を抱いている人たちとは視覚的な関わりを求めていることをターナーは指摘する。

第二に人間は生まれつき社会的であるという前提がある点である。人間関係を円滑に進めるために、人は話し方や顔の表情、ジェスチャーにまで気をつかう必要があることから、「人間の社会性の欲求は、実はほとんどの社会学者が前提にしてきたほど強くはない」<sup>4</sup>という。

これらの点について、ターナーは生物学的な見解を加える。類人猿から進化した人間は、進化の過程で視覚の優位性が確立されていった。手足の関節なども発達し、ジェスチャーで伝えられる情報が多くなったことも相まって、人間にとって視覚的な対面的相互作用は重要なものとなったのである。また、類人猿は生存戦略として、ある程度感情をコントロールして連帯する必要があった。そのため人間は「社会的連帯と感情的愛着を強く願い、その一方であまり強く束縛されると、また緊密な社会圏に閉じ込められると憤りを感じる」<sup>5</sup>存在となったという。

個人が人と関わろうとする動機づけは、端的にいうと肯定的感情を自分のなかで喚起させるためである。どのようなときに肯定的感情が喚起されるかを分析するために、ターナーは「欲求状態」という考え方を提示する。相互作用の先行研究に共通していえることは「人間は充足すべき欲求状態をもっているということ」<sup>6</sup>であり、それらの欲求が実現されると、肯定的感情が喚起される。相互作用の様相はこの欲求状態の実現・非実現の経過を反映したものだと考えるのである。

その欲求状態とは①自己を確認し、検証したいという欲求、②肯定的な交換報酬を受け取りたいという欲求、③集団への内包感を持ちたいという欲求、④信頼感情を経験したいという欲求、⑤事実性を獲得したいという欲求、をもっている状態である。それぞれの欲求が実現したかどうかを確認するために、相手の反応が必要となるのである。

感情を分析する上で重要な2つの次元が「期待」と「裁可」である。人は、この出会いにおいてこれらの欲求がどのように・どの程度実現されるのか(あるいはされないのか)

という「期待」をもって出会いに臨む。その期待によってつくられるのが役割である。それによって人は行動し、その行動に対して相手が下すのが「裁可」である。その行動が、他者の要求や社会構造、文化によって設定された「想定される行動」と合っていれば、肯定的裁可が下され、合っていなければ否定的裁可が下される。肯定的裁可を得れば肯定的感情が喚起され、否定的裁可を得れば否定的感情が喚起される。

したがって、相手からいかに肯定的裁可を得るかということが相互作用で重要になってくる。そのためには、期待や役割の作り方で工夫をする部分と、裁可の受け方で工夫をする部分とがある。つまり、その出会いで実現されやすそうな期待や役割を見きわめることや、ほとんどジェスチャーによって黙示的に下される裁可を、相手と同じように読解・解釈することである。そのどちらにも大きく影響を与えるのが、「象徴の力」（期待を作る方向性をしめしたり、ジェスチャーの意味を作ったりする）、「地位の力」（その出会いで適切な期待と裁可を理解しやすくする）、「生態的な力」（出会いの起こっている場所、空間、小道具など）、「人口誌的な力」（出会いにおける参加人数とその人々の多様さ）といった、その出会いが組み込まれている社会構造や文化のもっている属性である。このような指針がなければ、個人は互いにどのように行動すればよいか分からなくなり、期待が実現される可能性が低くなってしまふ。この点で、相互作用は社会構造や文化に制約されているといえる。

相互作用を動かしている力をそれぞれ考察すると、マクロがいかにミクロを制約しているかという「下降型の強調が出会いの力学を理解するうえでもっとも適切であるということになる」<sup>7</sup>とターナーは述べる。ただし、一方的にミクロがマクロに制約されるというわけではなく、再帰的に影響を与える。ターナーは本書で主に描いていた下降型の力学の矢印が逆にもなり得ることを示唆して本書を閉じている。

#### 4. おわりに

本書によって、読者は自分と他者との関わり合いについて、そしてそれらが社会構造や文化にどのような影響をうけているのかについて考える際の視点を得ることができる。さらに、相互作用の反応として喚起される感情という観点は、学習について考察する手がかりにもなると考えられる。例えば、学習によって喚起させられることもある否定的感情とどう向き合うかといった問題や、否定的感情から出発する学習をどう捉えるかといった問題においてである。これらの課題については今後、じっくり考えていきたい。

#### 注

- 1 正岡寛司「訳者あとがき」『出会いの社会学 対人相互作用の理論展開』（ジョナサン・H・ターナー著、正岡寛司訳、明石書店、2010）、421頁。
- 2 ゴッフマン（Goffman,1961）による定義。本書、50頁より。
- 3 本書、21頁。
- 4 本書、20頁。
- 5 本書、117頁。

<sup>6</sup> 本書、170 頁。

<sup>7</sup> 本書、411 頁。

【参考文献】

1. Hammond, M.2002.Book Review Jonathan H. Turner Face to Face: Toward a Sociological Theory of Interpersonal Behavior. *Canadian Journal of Sociology Online* November – December 2002.  
<http://www.cjsonline.ca/reviews/face.html> (2013/01/22 参照)
2. Kristiansen, S.2004.Book Reviews Jonathan H. Turner Face to Face: Toward a Sociological Theory of Interpersonal Behavior. *Acta Sociologica*47(1), pp.102-104  
<http://asj.sagepub.com/content/47/1/95.citation> (2013/01/22 参照)